口語詩句８月　　龍　秀美　　202408

＜総評＞
「意味」あるいは「意義」という文学においては危険なものを短詩形でどう扱うか。言葉のさまざまな使い方を通して、恐れずにそれらを試してみるのが口語詩句という場かも知れない。そんなことを感じさせる作品を選んでみた。

感電のように
ひらめく
夏に居て
孤独はだれのみかたでもない

さいう　石川県
――最近は雷が多くなった。遠くで響くゴロゴロも近くの轟音も恐ろしいが、生きる倦怠感をひと時吹き飛ばしてくれる。そのとき「孤独」も鮮やかにそばにいる。

靴紐をほどいて死のようなかたち

杢いう子　佐賀県
――紐という束縛をほどかれた靴は無力だ。ピクリとも動けない。生に使役される人間の、死の比喩として即物的で面白い。

向日葵の折れる形に祈る人

田崎森太　東京都
――向日葵はその巨大な花が一たび折れると、首からガックリと落ちて盛大に絶望するかたちになる。祈りも純粋だろう。

ドアノブを
舌を這わせるように持ち
卵のように右に回した

香取小春　宮崎県
――ドアノブは必ず肉体で触るもの。そして壊れやすい卵のようにそっと扱うもの。セクシーだ。

野仏に名前をつける夏休み

日下部　友奏　群馬県 18 歳
――夏休みという大きな自由時間の有意義な過ごし方。つまり自分だけに大事で、人に知られず、役に立たないことをする。

甘酒にリップクリーム混ざる夜
犬歯のふがいなさ一段と

汐見りら　東京都
――柔らかいくちびるの皮膚に優先的な、口回りの葛藤の風景。忘れられた野生はどこに。

生きるため飲みほした水が
生きるのを拒否するように
目から出てくる

橋口　諒介　東京都 18 歳
――自然の循環は感情に無関係なのだ。

折りたたみ梯子は軽い木製で
裸足でのぼる前提で買う

土居　尚子　東京都
――身体で感じることでしか判断できないことがある。

雷が顔にもたらす可能性

太代　祐一　神奈川県
――閃光が照らし出す表情はさまざまだ。足や手には関係ない。顔にとって雷は可能性のツールか。

湖が枯れてしまっても鳥は来て
なんで来たのか忘れて帰る

中原紘　山口県

――笑ってしまう。最近のわが身にも似て。

天王星に着いたなら
永遠にタオル畳もう縦の自転で

水嶋　理　埼玉県
――「た」行の音韻の畳みかける面白さ。

からまった紐
からまったままに置く

加那屋こあ　東京都
――人の世はそういうことが必要なときが多い。

ががんぼの足の刷られる図工室

檜野　美果子　宮城県
――カトンボとも呼ばれ、取るに足らないもののたとえにもされる昆虫。細く長い足がすぐ壊れて紙などにくっつき、図工室のローラーで刷られてしまったらしい。望みもせず姿を残してしまう。人もまた。

ふろ自動みたいに麦茶注ぐ母

檜野　美果子　宮城県
――必要な時に必要なことを物理的に済ませる。喰う飲むことに儀式を要求する男と違って、育てる人「母」はきっぱりとそういう存在でもある。

幸せになろうよ触れない範囲まで

ときたま　東京都
――ガードしている自我との距離で成り立っている他者との関わり。その禁忌に触れるところまで行くのが愛であるかも知れない。

きぬかつぎ
女みたいなことばがぬっ

絵巻　東京都
――「きぬかつぎ」という女房詞も優雅だが、どこか得体の知れないぬめりも感じさせる。「ぬっ」という副詞の使い方が巧妙。

ああもう
きみが微笑むのがいけないんだ
いちいち床が抜ける

ルイ・アナン　千葉県
――恋人が微笑むたびに「床がぬける」ほどショックを受ける。恋心がストレートに表現されていて力強い。